
t become the samurai,the world changes....

黒糖パン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士魂 If the knight become the samurai the world changes . . .

【Nコード】

N0569Y

【作者名】

黒糖パン

【あらすじ】

この小説はもし銀魂の坂田銀時の役割にブロントさんが入れ替わったら、という良くわからない作者の妄想で出ています。

「そんなの銀魂じゃorブロントさんじゃない！」という人にはオススメできません。

こんな駄文でも一向に構わんツ！！という人だけご覧下さい。

それでは、

騎士魂

If the knight become the samurai,
the world changes

プロローグ：黒い世界の銀の光

少年はある村で育った。

親の記憶は無く、ただ気が付いたらその村にいて、その村で育って現在いまに至る。

少年は周りとは違った。

とがった耳、輝く銀髪、赤く光る両目に褐色の肌、何処を見ても周りとは違う容姿をしていた。

村はそんな少年を遠ざけた。

理由は『自分と違うから』。

その言葉にあるのは『恐れ』、一人違う少年への『恐れ』。村は少年を『悪魔の子供』と呼んだ。

村に厄災が起こった。

唯の偶然、その厄災は二度続いた。

村は災害を少年のせいだと決め付けた。

理由は『自分と違うから』。

少年は村の青年に囲まれた。

怖かった、恐ろしかった。

自分とは違う『普通の人たち』がもつと恐ろしい化け物に見えた。

死にたくなかった、だから逃げた。

怖かった、だから村の物置に逃げた。

生きていたかった、だから咄嗟に置いてあった刀を持った。助かりたかった、だから斬った。

『普通とは違うから』、だから人を殺した。

村は悪魔の子供を殺そうと、大勢で襲い掛かった。だが、少年に切り傷を負わせた者はいなかった。残った村人も逃げ出して、村には少年しか居なくなった。

周りにあるのは黒の色。

人間だったモノから溢れ出す血も、それに染まったモノも、落ちている頭も、飛び回るカラスも、血で錆付いた刀も。

『自分と違う』黒の色。

どんなに返り血を浴びても、少年の髪は黒くは輝かなかった。

その世界に自分と同じ色を持つ人が来た。

白よりも銀に近いその髪を揺らしながら、その人は悪魔の子供に微笑んだ。

「屍を喰らう悪魔が出るときいて来てみれば

……君がそう？

「またずい分とカワイイ悪魔がいたものですね」

刀を抜いた、そこに意味は無い。

あるとすれば『自分と同じだから』。

「刀で自分の身を護ってきたんですか、たいしたもんじゃないですか」

自分と同じその人は、とても輝いて見えた。

自分と同じ銀色の光は、自分より輝いて見えた。

「そんな剣もついでにありませんよ」

他人におびえ自分を護るためだけに

ふるう剣なんてもう捨てちゃいなさい」

その人は刀を手渡した。

その人が手渡してきた刀は、黒く染まった刀よりも白く輝いて、美しかった。

「くれてあげますよ私の剣

剣そいつの本当の使い方をしりたきゃ付いてくるといい」

『自分と同じ色の、違う人』が向けた背中が、刀に見えた。

『何か』を貫く一本の刀。

「これからはその剣をふるいなさい。

敵を斬るためではない、弱き己を斬るために

己を護るのではない、己の魂を護るために」

その言葉はとても心に響いた。

この人についていけば世界が変わるような気がした。

その人は振り返り、微笑む。

「君の名は？」

この人の様に輝きたい、だから自分は名乗った。

「…俺はぶろんと、『唯の』ぶろんとだ」

第一訓：侍魂だとか騎士道だとか関係なく甘いモンは神の贈り物

『侍の国』、僕らの国がそう呼ばれたのは今は昔の話。

江戸時代末期に異星からやってきた『天人』あまんとに戦争で負け、幕府は開国をした。

今は町の真ん中を我が物顔で天人が歩き回り、空には異郷の船が飛び交う。

国の為に戦った侍は犯罪者として弾圧され、廃刀令により力を失った。

後のご時勢に剣術道場だけで乗り切れるはずも無く僕、志村新八しむらしんぱちはバイト続きの毎日だ。

いつも通りの日常、店長に怒鳴られては殴られて、客の天人には馬鹿にされる、そんな毎日。

そんな毎日を木っ端微塵にバラバラにした男がいた、その男と出会ったのは…

「ついさっきのことだよキショオオオオオ！！！！！！」

現在僕は今、バイクに乗った一人の男を追いかけている。追いかけている。

どうしてこうなった！？僕は普通にバイトしてただけなのに！！
そうだ！コレも今追いかけている男のせいだ！！
これはさっきの話！回想入りまーす！！

僕は普通にバイトをしていた、客の天人にちょっかいをかけられるのも

もう普通に成り果てている。

奥の席に座っている客にパフェを持っていこうとした時、前の席に座っていた

猫頭の天人に足をかけられ、転倒してしまった。

自分をあざ笑う声、店長の怒声。

て
こんなのはもう普通なんだ、今のご時勢に誇りを失わない人なんて

「…おいイ？」

そんな時にその男は現れた。

銀色の髪に褐色の肌、とがった耳に赤く光る死んだような目。

紺色の着物…というか甚平、腰にかけられた木刀。

少し変わった風袋ではあるが、天人…ではなさそうだ。

天人なら木刀なんて持ち歩かないだろうし、和服も着ない。

でも廃刀令のご時勢に木刀なんて…。

「oi みうs ミスおい紀伊店のかおまえらが騒ぐ所為で

俺のパフェがこぼれちまったんだがパフェ代払え」

「…は？貴様、我等が誰だと思て「ハイスラア！！」ゲフウ！？」

あまりの早業に一瞬何が起こったかわからなかったが、男は突然腰に差してあつた木刀を引き抜き、真つ直ぐ振り下ろした。

「俺のジヨブはあまり金策には向いていなくてよ…
パフェなんてどちかというと全然食べれにんだが！」

男が走りこみ木刀を一閃したかと思うと、次の瞬間には次々と猫頭天人は倒れていった。

その男は侍というにはあまりにも荒々しく、不良というには

「味は悪く無かったという意見だな」

真つ直ぐな眼をした男だった。

訂正、まんま不良だよ！凶器の木刀僕の腰に差して拳銃の果てに逃走しやがったよ！

バイトは首になるしこの歳で未遂で犯罪者とか真つ平御免だわ！

「ちよつとオオオ！！そのアンタ止めエエ！！」

「む？さっきの少年か木刀なら別に返してもらわなくても別に良かったんだが？」

「そつちじゃねエエエ！！アンタ…ゼエゼエ…よくも人様を囿にして逃げてくれやがりましたね！！！」

「俺は不良だからなむかつくヤツは九メートル吹き飛ばすしバイクもヘルメットかぶらないで乗る」

「喧しいわポケエエエ！！侍雇つてくれる所なんて殆ど無いんだぞオオオ！！」

明日からどう生きてけばいいんじゃあアア！！」

こうなったらその銀髪にこの何故かカレー臭い木刀返却してやる！！
そう思つて男に木刀を振りかぶつて飛ぶ！

そのまま男のバイクは急停止し、僕は男として大事なあの部分を感じつきり粉碎される羽目になった。

言葉に出来ない激痛に悶絶していると、男がバイクから降りてこつちに近づいてきた。

「お前だけが不幸だとか思つてる時点でおまえは駄目世の中にはダンぼんルをHPとして生きてるやつもいるからなお前はもつとポジティブに生きることが必要不可欠」

さっきまで不幸をポジティブに考えていたのをぶち壊した張本人が一体何をほざきやがるんだ、と怒鳴ろうとしたが声が出ない。ようやく痛みが治ってきて怒鳴ろうとした瞬間

「あら？新ちゃん、こんな所で何しているの？お仕事は？」

今一番聞きたくない声がかかった。

志村お妙しむら たえ、僕の姉上だ。

「仕事もせんと何ブラブラしとんじゃボケエー!!」

驚きの悲鳴を上げる暇も無く、姉上は三メートルほど跳び上がると見事な跳び蹴りをかましてきた。

そして一瞬で馬乗りになり、残像が見えるスピードで殴りつけてくる。

「ちよ、待って姉上!こんな事になったのはあの男の所為で…ってああ!」

男の方を見ると既にバイクで走り去っていた。

「わるいな俺は帰って帰ってドラマの再放送を見る系の用事が…」

男の表情が見る見るうちに驚愕に変わる、そりゃそうだ。

さっきまで馬乗りになって人殴ってた女がいつの間にか

自分のバイクの後ろに乗っていたら誰だって、僕だってそうなる。

次の瞬間、男は『飛んだ』。

「…いやマジで死にたくないから謝ります!すいまえんでした…」

顔を倍位にした男が見事なジャンピング土下座をしたが、姉上は笑顔で刀を抜く。

「御免で済んだらこの世に役人や切腹なんてものは存在しないわ。ウチの道場は貴方の所為で存続すら危ういのよ？」

…そう、ウチの道場は僕と姉上のバイト代で何とか切り盛りしてきた。

それが片方断たれた今、この時代に道場を続けていくことはとても不可能と言えるだろう。

「それでも、父の残したこの道場を護ろうと必死に頑張ってきたのに…」

「テメエの所為で台無しじゃボケエエエ!!!」

般若のような表情で刀を握り、男に襲い掛かる姉上を何とか止めるとりあえず人殺しはまずいって!!!!

「…おもえの姉ちゃんはゴリラの親戚かなにかでFA?あまりにも凶暴すぎるでしょう?」

「ちょ、何煽ってんのこの人!? ヤバイ力が上がってきたその言葉には

一応同意するけど今の状況で口にするのはまずいって!!!

「ちょっと待つべき!切腹とかはstyleならんが俺だって自分のミスは

自分で何とかする」

そういうと男は甚平の懐をあさり、一枚の小さな紙を取り出す。

「…万事屋DRACK？」

確かにそう書かれていた、っていうか綴り間違っただけ？

「この時代には仕事は選んでられないから頼まれたら何でもやると言うことをジョブにしてるプロントだ、困ったことがあったら何でも解決してよ」

牽制志村拳！男の言葉を遮りたこ殴りにする。

姉上も同時に考えていたようで二人でボコボコにした、この辺は流石姉弟。

「テメエの所為で困らされてるわあ！！」

「現在アンタの所為で困ってたんだよ！！仕事紹介しろ仕事！！」

「お落ち着くべき！仕事紹介は出来にいが

『誰でもできる！喧嘩の極意本 b y プロント』を特典付きで奢ってよ」「いらんわ！！」「オウファア！！」

この瞬間、男は再び『飛んだ』。

第二訓：金貸しは汚いやつが多いので要注意

僕の父上は、とても不器用だった。

『侍の刀はな、鞘に納めるもんじゃねえ

テメエ
手前の魂に納めるもんだ』

僕らには何もしてくれなかった、何も残しちゃくれなかった
ハゲジジイ。

お人よして義理だの人情だのくだらない事ばかり言って、
借金抱えて死んだ大馬鹿野郎だ。

『時代はもう侍なんぞ必要としちゃいねえがよ…』

どんなに時代が変わろうが、人には忘れちゃならねえモンが有る』

その大馬鹿野郎の生き方は

『例え剣を捨てる時が来ても…魂に納めた真っ直ぐな剣だけは捨
てるな』

馬鹿らしいほど、真っ直ぐだった。

さっきまで破壊音や悲鳴（と言うか断末魔）に包まれていた道場も白髪の男が黙った（黙らされた）事で静寂を取り戻した。

現在白髪の男…もといブロントさんの状況は、二人のアップで宙を舞った後、お妙の空中墮落としをもらって道場の地面に顔だけが埋まつている状態だ。

…死んでいないのはギャグ漫画補正、もといギャグ小説補正です。

「姉上…やっぱりこの時代に剣術道場なんて、度台無理なんだよ」

しんとした道場の空気を換えるように新八が呟く。

どれだけ頑張ってバイトをしても、この廃刀令の時代では

門下生の一人すらくる筈も無い。

そもそも必要が無いのだ、この時代に必要とされるのは剣術ではなく

天人相手に頭を下げて機嫌を取る技術^{スキル}。

こんな道場は新八達にとっては錘にしかない。

「こんな道場必死に護ったって、僕ら何も」

「損得なんて関係ないわよ」

だが、間髪いれずお妙は言い捨てた。

「親が大事にしていたものを子が護るのに、

理由なんて要るの？」

その目に揺るぎは無かった。

錘も自身の辛さも全く省みていないその目は、死んだ二人の父にそっくりの目だ。

「でも姉上！父上が僕らに何をしてくれたって」

その時、ドゴツという音と共に道場の扉が壊され、

数人の天人が土足で押し入ってきた。

黒服の天人達は三人を囲むように立つ。

その天人たちの緑色の顔さえなければどこぞの極道映画か？とも取れるような雰囲気だ。

その黒服たちを掻き分けるように一人の天人が出てきた。

「今日と言う今日はきっちり金出してもらおう！」

ワシもう我慢できへんもん！イライラしてんねんもん！」

緑色の肌に長い鼻、眼鏡に赤い髪のおかつぱ。

あえて言おう、気持ち悪いと。

「おいイ…お前らその歳で借金とかsyleならんしょこれは？」

ガリ食ってでも金は借りるなという名台詞を知らないのかよ」

さっきまで顔を二倍くらいに腫らしていたブロントさんがいつの間にか完全復活を果たしていた。

ゴキリ並みの生命力の強さだ…鼻から一筋の赤い線が伸びているが。

「僕達が作ったんじゃない！父上が！」

「何をゴチャゴチャ抜かしとんねん！はよ金持ってこんかいボケエ！
はよう帰ってドラマの再放送みなあかんねんワシ！！」

関西弁の天人がなにやら意味不明の動作をした後
奇妙に迫ってくる。

なんかもう、すべてが人を不快にさせるような動作だ。

「ちよつと待って、今日は」

「じゃあかしいわ！！」

新八がおずおずと言い出ると関西弁天人は再び怒鳴り声を上げる。

「こつちはお前のおとんの代から待ってんねん！

もう禿げるわ！！

…払えんときはこの道場売り飛ばすゆうて約束したよな、

あの約束守ってもらおか！！」

「ッ！！ちよつと待ってください！！」

関西弁天人は再び新八に迫ると、それを遮るように
お妙が前に出る。

「なんや、もうええやろ？借金残して死にさらした

馬鹿親父に義理なんて通さんで」

次の言葉に繋ごうとした関西弁天人の顔面にお妙の鉄拳がめり込
む。

ぐへつと情けない声を上げ、関西弁天人は床を転がった。

黒服天人が慌てて新八とお妙を押さえつける。

「このポケエ…女やからって手エ出さんとても、
思つとんのかア!!」

関西弁天人が思いつきり拳を振りかぶり、黒服に押さえつけられて
いる

お妙に殴りかかる。

だが、その拳はお妙をかばったブロントさんの腕に当たると
ゴキリと言う鈍い音を放った。

「あだあああああ!!?」

関西弁天人は涙目になりながら右手の手首を押さえつけて
悶絶する。

本来手首が曲がらないはずの方向に曲がっているとところを見ると、
確実に捻挫レベルの話ではないだろう。

「確かに相手はゴリラ遣伝子を持つゴリラ女だが
それなりの扱いがある」

ブロントさんが言うが関西弁天人はそれどころではないようで、
ごろごろと床を転げまわっていた。

慌てて黒服天人がお妙と新八を放し、関西弁天人に駆け寄る。

「な、何をするんだ貴様ア!!」

「h a i?おれは何もしてないんですがねえ?

俺が何かしたって言うなら証拠出せよ出せないなら俺の勝ち」

黒服天人たちは懐から銃を取り出すと、ブロントさんに向けた。だがブロントさんは全く慌てた様子無く、耳の穴をほじって死んだ魚のような目を更にかつたるそうにしている。

黒服天人の一人が銃を撃とうとした瞬間、その天人は顎を木刀で下から

撃たれ、床に崩れ落ちた。

今度は全員が一斉に銃を構えるが、木刀に横になぎ払われ、あっさりと道場の縁側から外へと打ち出されていく。

「銃は剣よりも強しとか俺のシマじゃノーカンだからな
ズタズタにされたくないなら今のうちに謝るべき」

ブロントさんは木刀を納めると、悶絶している関西弁天人に歩いて近づいていく。

既に黒服天人で立ち上がっているものは無く、そこら中から苦痛のうめき声があがっている。

「な、こ、こっちは金貸してやった側や！
金返してもらうんが何か悪いんか！？」

「金を貸したのはお前だが貸してもらったのはこいつ等じゃなくてこいつらの親父だという事実おもえがこいつらに粘着してる間にも時代は進んでいるいい加減にその事実を認めろよ
いい加減にしないと俺の拳で即死で瞬殺する」

ひい！と情けない悲鳴を上げた後、既に逃げ出している黒服天人たちを

追いかけるように、関西弁天人は逃げていった。

啞然としている新八達を横目に見て、ブロントさんは

「ドラマの再放送がもう始まりそうなので急いで帰ることにする
道場散らかして悪かったな」

と言つと、さっさと道場を出て行ってしまった。

「でなんでお前が此処にいるんだよストンカーは犯罪だぞ
真撰ポリスに捕まって屯所で臭い飯食うハメになるぞ」

「いやアンタ名刺渡して行つたじゃないですか……」

万事屋Drak内部、スナックお登勢という店の二階にあるこの
店のリビングは
赤っぽい壁紙と中央の緑の正方形のカーペットと、
その上の正方形のテーブルにそれを挟む形に並べられた青いソファ
という
まとまりの無い雰囲気をしていた。

奥の社長が座るような木製業務用の机の横には冷蔵庫と筆筒が並
び、

その反対にはテレビが置いてある。

上にかけてある額には『ダイヤモンドパワー〜鋼の精神〜』と書かれていて、

…一つもあっていない。

「で一体何の用なんですかねえ？依頼ならさつさと用件を言っして下さいア」

フロントさんは机の上に乗ったケーキを口の中に放り込みながらジャンプを読んでいる。

「はあ…まあいいですけど、用件って言うのは

僕を此処で働かせてほしいんです」

拝啓、父上。

この時代に、貴方が言ったように魂に収めた剣を捨てない男がいました。

少しこの男に近づいて貴方の言った『魂』を、貴方のような馬鹿らしい

生き方を学んでみようと思います。

新八。

第三訓：本編で前回の蛇足ってかなりヤバイ気がする

かぶき町は人口が多い。

首都である江戸にあるのだから当然とも言えるが、最近ではかぶき町に

住み始める天人も増えた為、以前にも増して住宅やビルなどの建物が増加した。

建物が増加するということは路地裏が増えることを表す。

迷宮のように複雑な路地裏の一つ、スナックお登勢の裏。

裏の廃墟をぶち破って作られたその空間は薄暗く湿った空気が流れ、

無造作に積み上げられた土管やガラクタにはくもの巣が張り巡らされている。

そしてその薄暗さに比例するような物々しい輩が数十人ほど、物騒な刀を腰に差して

その場所を占拠している。

その全員が黒衣着物に身を包み、緊張した表情を浮かべている。

カランと路地裏に響く音、地面に何か堅いものが当たるその音はある人物の到来を意味した。

黒い甚平に腰には木刀、尖った耳に褐色の肌のその男。

死んだ魚のような目の奥には紅い眼光を光らせ、

銀色の髪は薄暗い闇の中でさえ輝きを失わない。

男がその空間に來ると、そこに居た全員が立ち上がり一斉に叫ぶ様に

『『こんにちはブロントさんッ！！』』

頭を下げ、挨拶をした。

路地裏を占拠しているのはかぶき町に力を拡大させている一つの勢力、

『喧嘩チーム（裏DRAK）』だ。

現在は数十人しか集まっていないが、全員を収集させればその数は数百人相当となるだろう。

その勢力の強さは『かぶき町四大勢力』の一つに裏DRAKの名が刻んであることが証明している。

だがこの勢力は不良ではなく喧嘩チームであって、裏の世界の仕事は全くしていない。

メンバーの殆どが名を聞けば裏の人たちが拳つてスカウトしに来るほどの

者達だが、足を洗った今ではすっかり顔の険も取れて見る影も無い。だが力は失っていないらしく、もう一つの『かぶき町四大勢力』である

極道を仕切る『溝鼠組』でさえ出会えば道を避けるといわれる。

そのリーダーであるブロントさんは眠そうに欠伸をし、頭を掻く。

「俺にとってはおはようだがとりあえずあの件の奴の情報は

見つかったんですかねえ？」

ブロントさんが土管に座ると、メンバーの一人がある人物が写った写真を手渡す。

そこにはおかつぱ頭で緑色の天人がいやらしい笑みを浮かべていた。

「ほうよくやったなと感心が鬼なるがコイツの居場所とじゃクウ店

の情報を
詳しく」

今度は違うメンバーの一人が一枚の紙を手渡す、そこにはある浮遊遊郭について

調べた情報と、幕府の法から違反しているというマークが付いていた。

更にその書類の経営者欄に、あの緑色おかつぱ天人の顔が張っている。

それを確認するとブロントさんは僅かに口角を吊り上げて、立ち上がった。

「よしおまえら準備は出来てるか？おれはとっくの古代から出来るが」

『『もちろんですブロントさんッ！！！！』』

全員が声を揃えて刀を天にかざすと、反射された日光で路地裏が白に塗りつぶされた。

「悪事働くヒキョウ者は！」

『『スタスタにする！』』

「弱い者いじめと化するカスは！！！」

『『バラバラにする！！！！』』

「忍者は！！！」

『『汚いな流石忍者きたない!!!』』

それぞれが刀を鞘に納め、浮遊型バイクに乗り込んだ。

次々と飛んでいく黒いバイクが町の上を駆けて、空の向こうへ消えていった。

翌日のニュースには大きな見出しで

『違法浮遊遊楽海に墜落！幸い大きな怪我人は無し』と書かれていたという…。

第四訓：主人公は歩けばトラブルにエンカする

「おいコラボフロントオオ！！！テメツ家賃払えって言ってんだろ
うがア！」

現在時刻は午前十時を少し過ぎた頃、万事屋DRAKの扉を鬼の
形相で叩きつつ
叫ぶ老婆が一人。

お登勢、万事屋DRAKの下にあるスナックお登勢の営業主であり
フロントさんの家、つまり万事屋DRAKの営業所の家主でもある。

何時までも返事がないことにイライラしながら叩く力を強くして
いくと、
不意に和室にあるようなスライドさせる式の玄関扉が勢い良く開か
れ、
今まで寝ていたのかぼさぼさの銀髪を靡かせたフロントさんが出て
きた。

「無い袖は振れにいつているババア！！アレだろこの前テレビ
直したから

それでチャラでFA！！！」

「ふざけんな五ヶ月分の家賃があんなもんでチャラになるかボケエ
！！！」

「九ヶ月でいい」

「やかましいわこのドアホ！っ！かこの前直してもらったテレビも

昨日煙と根を上げたわア！！」

わーわーと朝っぱらからコントのような喧嘩をしていると、またですかと

言わんばかりの呆れ顔をしている新八がお妙の道場から出勤してくる。

今日も万事屋は平和である。

「そついえば恭賀月曜日だったことをすっかり忘れてしまっていた感新鉢折るはジャンプ買いに言うてくるが何か欲しい門とかあったら買ってくるぞ」

フロントさんはいそいそとパジャマ代わりにしているジャージを脱ぎつつ、

箆笥から愛用の甚平を引っ張り出す。

全体的に紺色で銀色の髑髏の刺繍を背中に縫い付けてあるそれはいかにも不良オーラを醸し出している。

「あ、だったら僕も行きますよ。お通ちゃんのCD出てますし」

新八は読んでいた求人雑誌を静かに立ててテーブルに置くとフロントさんが着替え終わるのを待つ。

横に広いかぶき町の通りを黒光りした大型のバイクが規則正しい音を立て、道の中央を勢い良く走っていく。

手入れがしっかりされているそのバイクは、ガラスで囲めばバイク店の臨写と勘違いしそうなほど目立った傷一つ無い。

横には白色で稲妻型に走った太い線と大きく金色で喧嘩チーム（D R A K）と描かれていて、普通なら羞恥プレイもいところだが

周りはあまり気にした様子も無い。

定期的に走っているので風景と化しているか、D R A Kに逆らうことを

恐れているのか、あるいは両方が。

「何かいきなり臨時収入が入った系の出来事があったからとりあえずまずはジャンプを買って次に

夢の糖分大帝国を冷蔵庫に築き上げることにした（リアル話）」

恐れられる一番の対象である喧嘩チーム首領のブロントさんはバイクのアクセルを軽く回しながら鼻歌交じりで運転中である。

ちなみに新八は何度かブロントさんの糖尿病の付き添いで

病院に言ったりしているのです、威厳とか覇気とか本当にあるのかこの人と思っっているわけだが。

「止めといてくださいよ、病院で医者にまたお前らか的な視線を向けられるのは結構辛いですから」

言った後にはあ、と軽くため息をつく。

ドクターストップもガン無視でファミレスとかでパフェなどを

頼みまくって山積みガラスで周囲をドン引きさせたりと、
フロントさんの糖分摂取量は割りとヤバイ方向で半端無い。

本人曰く「喧嘩する カロリー消費 糖分摂取 エネルギーが豊
富で

喧嘩が強い 彼女が出来る」だそうだ、訳がわからない。

「おいイ？ 芯八は何故そんなにイライラしてるんですかねえ？
生クリームを取るといいぞカルシウムと糖分が一気に取れる
奇跡の食物だからな」

「いやカルシウム不足とかじゃなくアンタのせいだからね？」

「人に責任点火するとか汚いなぱっつあん流石きたない」

「…ああもういいですよなんだか疲れるんで」

何かぎゃあぎゃあと言ってくるフロントさんを無視し、とりあえず
またため息をついてみる。

「とりあえず前見て運転してくださいよ、誰か轢いたりでもしたら
s y l e にならな」

振り返る新八の視界の中には、何かこっちに話しかけている
フロントさんと、変わらず黒光りするバイクと、その前を今正に
横切らんとする赤い服を着た少女が

ガンツ、と音を立てて轢かれ、弧を描き宙を舞うと、鈍い着地音と

共に
地面に落ちた。

「言ったそばからあああああ！！！ちよっ、コレどっするんですか」

「フロントさん！！？」

「おお落ち着け新あp地これは夢だ英語で言つとドリーム
素数を数えて落ち着くんだよいsん派血
あれだよ今日の俺の運勢は絶好調で有頂天だから
奇跡的に無傷」

少女の肩を持ち、軽く起き上がらせると生々しい血溜まりが

「センチメンタルドリーイテム！！！！」

見た瞬間適当に少女を紐でくくってバイクの後ろに座らせる感
いで乗せ

即効で走り出した。

「もう俺はあの天気予報BAN組を見ないことが確定したからな
これで言い逃れが出来ないあの天気予報是ツたいサイコロとか
転がるるして決めてるだろ！汚いな升ゴミ流石きたない！！！」

新オアチー！！様子はどうでF Aアアア！！？」

「駄目ですピクリとも動きません！！」

赤いチャイナドレスを着た赤橙色の髪を横に二つ団子のようにしている

少女は、ダランダランと両手両足をバイクの動きに合わせて投げ出すように揺らすだけで、目も空けないし動きもしない。

「アインハ！！おるはどこに行けばいいんだ屯所か病院か！？」

「僕に聞かれても知りませんよ！！」

「よしアレだとりあえず帰ってドラマの再放送見るべ！！」

「現実逃避してないでさっさと病院行ってください！

この子とアンタの糖尿病と精神科！！」

バイクは走る、目指すは病院。

後ろから追って来るものにも気づかず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0569y/>

騎士魂 If the knight become the samurai,the world changes....

2011年12月11日14時48分発行